

研究領域（Ⅰ） 学校経営

第1分科会 経営ビジョン

研究課題 明確なビジョンに基づく創意と活力に満ちた学校経営の推進

視点

① 子どもの未来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定

提案者 吉見町立西小学校長 小林 徹

1 はじめに

少子高齢化、情報化社会の急速な発展などの諸課題を受け、社会からの学校教育に対する期待は厳しさを増してきている。そのような中、学校が主体性を持ちながら、保護者や地域からの学校教育への願いや思いなどを土台とし、その延長線上に子どもたちの未来をしっかりと位置づけた学校経営ビジョンを示していくことが求められている。

2 研究概要

吉見町は、約2万人の人口を有し、町内には6つの小学校と1つの中学校がある。本年度当初の児童生徒数は11477人（西小166人）、教職員数は137人（同16人）である。

(1) 学校一丸となって進める学力向上への取組

平成30年度の吉見町教育行政の基本理念は「学びと絆を深める人づくり」であり、次の3つの実践目標を掲げ、町内全小中学校で学力向上に取り組んでいる。

- ① いちご学習（小）・稲穂学習（中）の推進
- ② 読書活動の推進
- ③ あいさつ運動の推進

これを受け、西小では学力向上を最重要課題と位置づけ、平成29年度はいちご学習、平成30年度は読書活動に焦点を絞り、学ぶ意欲・方向性の明示・適切な評価を柱として組織的な取組を重ねてきている。

(2) 具体的な取組

次の5つの視点から課題解決に取り組んでいる。

① いちご学習（小学校）



家庭学習4点セットとして「音読、計算ドリル、漢字練習、いちご学習」を位置づけ、それぞれの学年目標を設定し、毎日取り組んでいる。その中でも、「いちご学習」では、吉見町独自で作製した

「いちご学習ノート」を全ての児童に1人当たり年間6冊以上配付している。このねらいは、家庭学習の習慣化と基礎学力の定着を図ることにある。導入当初には、比較的取り組みやすい

「音読、漢字、計算」に比べて、「いちご学習」では、何をどのように取り組むのかという戸惑いが、児童・保護者に見られた。そこで、西小では、教職員や保護者と話し合いを重ね、以下のような取組を組織的に行った。

○年度末に各学年から実践事例を集め、教務部で印刷製本して、次年度当初に全児童へ配付する。

○担任は、いちご学習ノートを確認し、その内容について3段階で評価し返却する。

○学校課題研修を通して、担任の授業力向上を図るとともに、【授業→いちご学習での復習→ドリルでの習熟→テスト結果からの振り返り】というサイクルで取り組む。

○毎月「西小NO.1ノート」を各学級から2名程度選出して表彰する。また、実践事例を図書室前に掲示



する。 【西小NO.1ノート掲示コーナー】

○学級懇談会等で、保護者と話し合う場を設ける。

また、町内各小学校では、下記のような独自の工夫を図り、児童の学びの意欲を喚起するとともに学びの質の向上に努めている。

◇東第一小…いちご学習大賞、掲示コーナー

◇東第二小…いちご学習賞

◇南 小…いちごノート貯金シール

◇北 小…ゴンちゃんシール、掲示コーナー

◇西が丘小…いちご学習奨励賞

なお、中学校では、いちご学習が稲穂学習として引き継がれていく。小学校段階で、家庭学習が習慣化し、自分の学びを身に付けた生徒は、中学校の学習にスムーズに対応している。

② 漢字検定

平成27年度から、全額町費負担で、2年生以上の全児童・生徒を対象に漢字検定を行っている。これは、毎日コツコツ積み重ねている努力の見える化と捉えている。西小では、年度当初に全体計画を確認

し、保護者に漢検へのプロセスを示している。そして、国語主任、教務主任を中心として、9月までの受検級決定と11月までの受検対策を、個別に計画し取り組んでいる。

1 学期 受検級の設定、受検級の問題集の配付、計画的な取組、個別指導、受検級の確定
夏休み 漢検練習用にいちご学習ノートを1冊配付
2 学期 模擬テスト、個別指導、各学校にて漢検実施
全受検級での合格率は、94%を超えている。この取組は、児童が個人でさらに上級を受検したり、家族全員で受検したりするという広がりにもつながってきている。

③ 暗唱と読書活動の推進



いちご学習ノートに、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」がある。本町の1年生は、全員がこの詩の暗唱に取り組む。校長室で校長と

【雨ニモマケズの掲示】 対面しながら、必死に児童は暗唱に取り組む。そして、見事合格すると、吉見町教育委員会から認定証が与えられる。

この他にも、西小では、国語部が企画立案し、各学年で詩や古典からの引用、吉見郷土かるたや彩の国21世紀郷土かるたなどの暗唱に取り組んでいる。さらに、昨年度末に教室に近い場所に図書室を移動した。すると、学校図書館や町立図書館の巡回図書から暗唱と関連する本を借りるなどの読書活動が広がってきた。

また、毎年12月に行われる生涯学習課主催による吉見郷土かるた大会や1月の彩の国21世紀郷土かるた大会では、町内の小学生が、日頃の取組の成果として、熱い戦いを繰り広げている。

④ 計画的に学ぶ授業研究会の実施

学力向上のためには、教師の授業力向上は不可欠であり、その授業力向上のためには、実際により授業を見る必要がある。その基本コンセプトのもと、町教委が予算化し、平成22年度から毎年各校1名ずつ県外先進校視察を行っている。主な視察場所は、全国学力・学習状況調査において常に上位の結果を残している秋田県、福井県、新潟県などである。また、平成23年度には、秋田県から小中学校の先生方を吉見町に招き、9年間を見通した取組や授業の工夫、保護者への働きかけなどについて研修する場を設けている。

2学期に視察を実施し、3学期の報告会において、その成果を報告し、各校の研修に活かしている。昨年度の西小では、具体的な授業の流れや教室掲示などについての報告をもとに、授業改善に取り組んだ。

⑤ 情報の共有と新たな視点の獲得

各校の教務主任を中心とした学校教育推進委員会を毎月設け、各校の学力向上の取組や課題解決について話し合う場としている。この会議には、町教育長と指導主事、代表校長も加わり、町教委と学校で連携した取組に努めている。経験年数が10年以下という本校の教務主任にとっては、この会議が貴重な情報交換の場となり、新たな視点を獲得し西小の教育活動充実に取り組めるという大きな役割を果たしている。

(3) 成果

これまで学力向上を最重要課題とし、およそ10年にわたり取り組んできた。その間、生徒指導上の問題が減少するとともに、町内各校では地域性を活かした積極的な学校経営が行われるようになってきた。

全国学力・学習状況調査の全国平均と町平均における「H28までの最大差」と「H29の差」を見てみると、次のように改善の方向を示している。

(国語A：-5.9→+4.2) (国語B：-7.0→+3.0)

(算数A：-7.3→+2.0) (算数B：-5.2→+1.0)

次に、埼玉県学力・学習状況調査では、西小の第6学年では、次のように変化してきている。

国語 H28:6-B(県6-C) H29:7-C(6-A) H30:7-A(7-B)

算数 H28:6-B(県5-B) H29:6-A(6-C) H30:6-A(6-A)

国語も算数も県平均と同様かややよい結果が見られ、変化の仕方も県平均とほぼ同様な傾向を示している。

3 研究のまとめ

5つの視点を中心に学力向上に取り組んできた。子どもの変容が、全ての指針と考えている。学力向上を目指し、子どもたち・保護者に示したいちご学習、漢字検定、「雨ニモマケズ」等の暗唱の3つの視点は、子どもたちにとって、当たり前のこととして定着してきており、学ぶ意欲も引き出している。そして、そのような子どもの姿を通して保護者の理解も進み、積極的な協力が得られるようになってきた。

また、他校の実践から得られた視点も取り入れて教職員間で具体的な話し合いを繰り返し、自らの取組と結果について振り返るとともに評価をし、工夫改善に取り組むというサイクルが確立されてきている。

今後も、新学習指導要領の示す児童像を視野に入れながら、学力向上を軸として、子どもたちの未来を見据え学校教育を充実させていきたい。

研究領域（Ⅰ） 学校経営

第1分科会 経営ビジョン

研究課題 明確なビジョンに基づく創意と活力に満ちた学校経営の推進

視点

② 学校の役割を明確にした創造的な学校経営の推進

提案者 富士見市立鶴瀬小学校長 山崎美晴

1 はじめに

富士見市は、埼玉県南東部、都心から30キロメートル圏に位置する住宅都市である。面積は19.77平方キロメートル、人口は約11万人、周囲は、さいたま市、志木市、三芳町、ふじみ野市、川越市に接している。

市の名前は、富士山がよく見えることに由来する。縄文海進による水子貝塚（国の史跡）が残っており、自然豊かな公園として整備されている。平成27年には、大型ショッピングモールがオープンし、人口の増加等、街を活性化させている。

市内には11校の小学校と6校の中学校がある。また、富士見市立特別支援学校や県立富士見高等学校が設置されており、小中学校と活発な連携を図っている。

2 富士見市教育振興基本計画

【基本理念】

学びあい 人がつながり 一人ひとりが輝く

富士見の教育

【めざす市民像】

- *生涯にわたって学び、考え、行動し、心豊かに生きる人
- *学びあいから交流の輪を広げ、信頼しあい、地域の絆をはぐくむ人
- *学びの成果を生かして、自ら社会に参加し、郷土（まち）の未来を拓く人

【基本方針】

- I 学びあい、高めあい、夢と希望をはぐくむ教育の推進
- II 学びあう地域社会をめざす教育の推進
- III 組織の総合力を生かした教育の推進

3 本校の概要

【基本理念】 すべての教育活動は子供たちのために

【めざす学校像】 教師も児童も共に学び、

和し、鍛え、輝く学校

【学校教育目標】 かしこく・やさしく・たくましく

本校は今年度、開校145年目を迎える、市内最初の学校である。児童数は617名、学級数は20学級（内特別支援学級2学級）。鶴瀬駅東側の住宅街が学区であり、古くからの市の中心地である。地域には、親子3代の卒業生も多く、学校に対して大変協力的で、連携しながら教育活動を行っている。

児童は、明るく素直で、子供らしい児童が多い。児童それぞれには課題はあるが、全体的に落ち着いた学校生活が送れている。学力・学習状況調査等では、やや平均を下回り、指導や学習習慣の改善を図ることにより、学力は向上すると捉えている。

4 学校経営について

(1) ビジョンを明確に示すために

- ・児童や教員の実態を踏まえた、わかりやすいグランドデザインを作成する。
- ・年度当初、校長の考えを全教職員が共通理解し、各自が取り組むべきことを理解するために、先に分掌を伝えて心構えを持たせ、経営方針について、中心になる教員を確認しながら説明する。
- ・年度の重点事項を、学年・学級経営案及び自己評価シートに反映させる。

(2) 創意と活力に満ちた経営を推進するために

- ・企画会を定期的に持ち、課題解決のための情報交換を行い、学年主任に主体的に取り組ませる。
- ・年度初めや人事評価の面談、教室訪問を通して教職員の特性を理解し、助言・指導を行う。
- ・校長室だけで、よさや努力を共有する。

5 学力向上への取組



学力向上をめざし、5つの柱を中心に学習規律の徹底（非認知能力の育成）と家庭・地域の力を取り入れながら、実践を積み重ねている。

(1) ユニバーサルデザインを取り入れた授業

すべての学級で、困難さを少なくした、わかりやすい授業作りを目指している。昨年度は、年度当初に、講師を招いた研修会を行い、教職員の共通理解を図った。また、特別

支援教育コーディネーターが、週目標を提示し、見届けを行っている。

～ユニバーサルデザイン・1学期目標～
教室環境を整え、ルールを確立させよう。

期間	目標	評価
4/24	教室前扉をすっきりさせる。 +ツグネットやフロント類は一面貼付はしない。 +廊下の端は、学校目標、生活目標など、必要に応じてしつかりつなげや写真の掲示が授業に活用する。	
5/15	合理的な場所や物の配置をする。 +廊下の一帯にのみ移動の足跡、学習用品の集積場所がみられる。 +教壇後、扉をどこへ出すものか、また、東側壁紙は別	

シールがもらえると 教員も嬉しい

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現

初任者や若手教員育成研修、教育実習生への指導等を活用して、互いに授業を公開し合い、教師の指導力の高め合いを行っている。また、2学期には、若手教員の指導力向上のために、学びたい教科の指導者を招聘し、一人一人の指導力に合わせた個人研修を行う計画である。



指導力を高める（アクションリサーチ）

(3) 少人数指導の充実

少人数指導加配2名と基準外加配、基礎学力定着支援員（市職）を活用して、全学年の算数で少人数指導を実施している。算数主任には、教科経営案を作成させ、児童の実態を踏まえ、計画的に指導を進めている。特に中～下位層を伸ばすために、単元の後半には、習熟度別指導を行い、誰がどこまでできているかを確認しながら、わかる喜びを味わえる授業づくりに努めている。



少人数で わかる喜びを味わう

(4) 学校研究「話し合い活動」

はっきりと自分の考えを伝え、友達の意見を受け止め、「自分もよく、相手もよい」方法を見だし、協力して実践する活動を進めている。学校研究として2年目の取組である。4月6日の学級開き研修から、指導者を計画的に招聘し、できるだけ多くの学級が指導を受けられるようにしている。足並みをそろえた研究を行い、2月1日の学校研究発表会では、全学級公開予定である。



自分たちで決めて 楽しいクラス

(5) 読書活動の推進

読書を習慣化し、様々な知識を身に付けると共に、豊かな心を育てることを目指している。本を読む環境作りや読書時間の確保、情報提供など創意工夫をした取組を行っている。また、教員の意識を高めるために、学級の子供に読ませたい本を選ばせる取組をしている。市立図書館とも連携を図り、ブックトークやビブリオバトル等を行い、図書館利用、読書量の増加を図っている。



職員の寸劇で 毎月の本の紹介（お話朝会）

6 まとめ

子供たちを伸ばしたいという教職員の強い思いが、創意や工夫を生み、2年間の学力向上の取組を充実させている。学力・学習状況調査の結果でも、よい伸びの傾向が示され、意欲は高まっている。ユニバーサルデザインや話し合い活動、読書活動の推進は、すぐに結果が表れるものではないが、学力向上につながるものであり、継続して取り組んでいくことが重要である。今後も教員の着実な資質向上をめざして、日々の取組を大切にさせていきたい。

校長として、元気な学校にするために、教職員一人一人を大切に思い、よさを認め、信頼関係を築きながら、力のある教職員を育てていきたい。

研究領域（Ⅰ） 学校経営

第2分科会 組織・運営

研究課題 学校経営ビジョンの実現を図る活力ある組織づくりと運営

視点

① 学校経営ビジョンの実現に向けた運営組織の刷新

提案者 さいたま市立大久保東小学校長 前島 一夫

1 はじめに

新学習指導要領では、学校と家庭、地域が連携・協働しながら「社会に開かれた教育課程」の実現を目指している。さいたま市では、平成30年度の教育行政方針の中で、「社会を生き抜く力をはぐくみ、多様な個性が活かされる教育の推進」を目標の一つとして掲げており、「学校・家庭・地域・行政の連携・協働による教育の推進」に取り組んでいる。学校においては、校長のリーダーシップのもと、学校の在り方や役割を見直し、自校の実態から課題を明確にし、課題の解決に向け、学校の経営ビジョンの実現が急務である。しかし、学校の抱える課題は複雑化・困難化しており、解決に向けての取組に関して、現状として、従来の学校運営組織では新たな課題に対応していくことが難しい。そこで、校内の運営組織だけでなく、学校と地域の連携・協働の重要性を認識し、「開かれた学校」の視点からも学校の運営組織を工夫するなどの刷新を図る必要がある。

2 本校の課題と学校経営ビジョン

本校は、さいたま市桜区の西部に位置し、本年度の児童数は713名（通常級22学級、特別支援学級2学級）、開校44年目を迎える。学区は広く、家庭環境も多様性が見られる。児童は、全体的に素直で、友だちにやさしく、活動的である。一方で基礎学力の習得に努力を要する児童がおり、基本的な生活習慣が身に付いていない児童も多い。外国籍の児童や発達課題を抱えるなど配慮を要する児童も在籍しており、インクルーシブ教育の視点に立った指導の充実に取り組んでいる。日々の生徒指導上の課題も多く、家庭の協力が難しいケースもあり、その対応に日々苦慮しているのが現状である。これまで、さまざまな課題を解決するために、教職員一人ひとりが児童に寄り添い、親身になった指導を繰り返し行ってきた。

こうしたことを踏まえ、学校経営方針を、『輝く笑顔「あい」にあふれる 大久保東小学校』として、次の3点を掲げている。

- 子どもたちが粘り強く学び合い、成長する学校
- 教職員が情熱と教育のプロ意識をもち、互いに支え合い「チーム大久保東」として実践する活気ある学校
- 学校、保護者、地域が役割を果たし、連携し信頼し合う開かれた学校

3 課題解決に向けた取組

本校の抱える課題を解決するために、経営ビジョンの実現が図られるための組織の刷新を、大きく次の2点から行った。

(1) 教職員の学校運営参画意識を高める分掌組織の刷新
 本校の運営組織において、これまで定例で行っていた委員会と不定期で行っていた委員会があった。定例委員会として、企画運営委員会、研究推進委員会、体力向上推進委員会、生徒指導委員会(教育相談も含む)で、それぞれ毎月の教育計画に位置付けられていた。しかし、会議時間の効率化や構成メンバーの偏りが課題として挙げられ、教職員の疲労感にもつながっていた。生徒指導委員会では、教育相談や就学支援にかかわる案件も多く、適切な支援策の検討に至らないケースが多かった。そこで次のような刷新を行った。

- ① 定例委員会を推進委員会とし、同時に開く。そのため構成メンバーはすべて違う教員となる。
- ② 推進委員会での内容は学年会等で伝達する。校務端末もフォルダを設け、内容が閲覧できるようにする。
- ③ 生徒指導委員会と教育相談委員会を別にし、教育相談委員会のみ推進委員会とは別日に開く。
- ④ 生徒指導、教育相談において、重要問題については、必要に応じて校内委員会を開催する。

これにより、時間の確保や効率化を図ることができた。構成メンバーも自覚をもって委員会に臨み、各主任が専門性を発揮し、本校児童や学校の抱える課題を解決するための方策を検討するなど、活発な取組がなされるようになった。特に、生徒指導委員会や教育相談委員会では、一つひとつの案件に対して学校全体でかかわろうとすることが意識化され、教職員の危機意識が高められた。校内委員会(ケース会議)も適切に行われるようになった。

〈平成30年度 学校運営組織図の一部〉

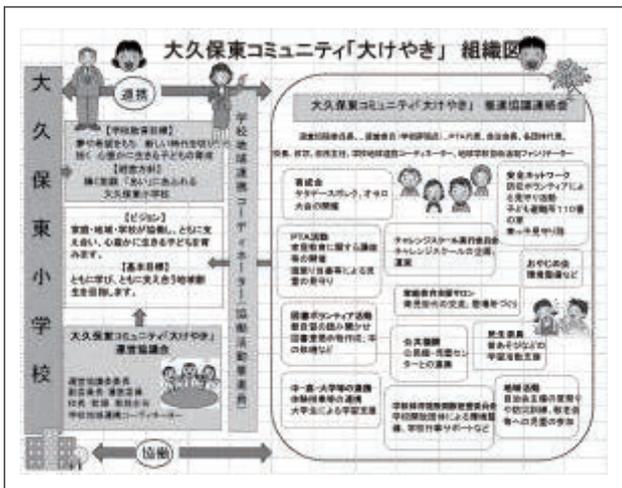
委員会	構成メンバー	委員							備考	
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援 本部		
企画	企画運営委員会	校長 ☆教頭	教務							保健主事 生徒指導主任 研究主任 ※学年主任(1年)
推進	研究推進委員会	校長	教頭	○教務						
	体力向上推進委員会	校長	教頭	教務						☆体育主任
生徒指導	生徒指導委員会	校長	教頭	教務						☆生徒指導主任
	教育相談委員会	校長	教頭	教務						☆教育相談主任 ※生徒指導別日
教育課程	教育課程委員会	校長	☆教頭	教務						運営企画委員
	セキハラバリアフリー防止協議会	校長	☆教頭	教務						
特別	学校保健委員会	校長	教頭	教務						☆保健主事 ※保健・健康委員会
委員	アレルギー対応検討委員会	校長	教頭	教務	学年担任	☆美護教諭	保健主事	○学校栄養職員		※全体会で実施
	校内委員会	校長	教頭	教務	学年教育相談担当	特別支援学級担	生徒指導主任	☆特別支援教育コーディネーター	○教育相談主任	※必要に応じ開催
員	いじめ対策委員会	☆校長	教頭	教務	学年担任	該当学年	関係専科教員	○生徒指導主任	教育相談主任	※必要に応じ開催
	入学準備委員会	校長	教頭	☆教務	1年学年主任	1年学級担任	2年学年主任	けやき担任		※1月に開催
会	卒業準備委員会	校長	教頭	☆教務	5・6年学年主任	5・6年学年担任	けやき担任			※12月に開催
	予算委員会	校長	教頭	教務	☆事務	各分掌主任				※5月に開催

(2) 大久保東コミュニティ「大けやき」の取組

さいたま市では、平成30年教育行政方針で、学校・家庭・地域・行政の連携・協働による教育の一つとして、「コミュニティ・スクール制度の構築」を掲げている。本校においても、地域の教育リソースを活用した学校教育を充実させていくことや家庭の教育力を高めていくことなど、地域住民や保護者等と共有し、地域と一体になって本校の児童をはぐむ「地域とともにある学校」へと転換していく必要性を強く感じている。

そこで、活力ある組織づくりと運営を幅広くとらえ、従来の学校運営と連動させて、これまでの学校評議員制度やスクールサポートネットワーク等の会議・組織の整理を図りながら、コミュニティ・スクールの構築を次のように取り組んでいる。

〈大久保東コミュニティ「大けやき」組織図〉



① ビジョン、基本目標、運営組織の刷新

これまでの学校評議員を拡充するとともに、市の施策や大久保東コミュニティ「大けやき」の必要性を、学校地域連携コーディネーターとともに校長が説明し、理解と協力を依頼した。ビジョン、基本目標を共有したうえで賛同をいただき、運営協議会の役割も担っていただくことができた。構成員は今後も拡充していく。

② SSNから推進協議連絡会へ

年度初めのスクールサポートネットワーク（SSN）会議において、従来のSSNの体制を基盤に、新たな観点（「応援・支援」から「連携・協働」へ）について、学校地域連携コーディネーターとともに校長が説明し、SSNから大久保東「大けやき」推進協議連絡会への移行の理解と協力を依頼した。構成についても新たに「地域学校協働活動ファシリテーター」を加えた。これは、学校の一方的な思いだけで連携しようとするのではなく、保護者・地域の意向やアイデアを聴取・調整し、運営参画していく役割を担っている。各団体の活動を整理するとともに、今年度の協働活動について各団体の要望も取り入れながら整理した。

③ 学校との連携、協働活動

これまで学校を支援していた防犯パトロールやチャレンジスクールなどの「個別」の活動を、地域と学校の将来構想・

目標を踏まえ、有機的に連動させ、総合的な広い視野で連携・協働していける活動になるよう留意した。さらに、校内に地域ふれあいルームを設け、地域の方やボランティアはいつでも利用できるようにしている。連携・協働例として次のようなものがある。

□授業支援と連携

学校の授業では、さまざまな教科や単元で地域の教育リソースを活用させていただいている。児童が学校内だけでなく地域に出ていき、地域の伝統行事、イベント、お祭りなどに実際に担い手として参画するよう計画に位置付け、調整している。

〈平成30年度「東っ子」サポーターズ連携授業一覧〉

学年	教科	単元名	サポーター詳細	実施日/内容
1	生活科	学校へ来る道・車と道路標識	公益財団法人交通安全協会職員(各1名) 各施設の見学案内と説明	6月13日(水)／通学路にある公共施設訪問・見学・施設説明
		昔あそび	大久保地区民生委員・民生児童委員(22名)	11月／地域のむかし遊び名人との交流(竹馬、こま、けん玉、はねつき、めんこ、あやとり、お茶玉、おはし(お盆人))
2	生活科	まちたんけん	2年保護者/児童の案内(1G2-3人) 地域活動ボランティア交通指導員/各ポイントでの見守り 地域の公共施設・店舗/見学と説明	5月31日(木)／自分の住んでいる地域にどんな施設やお店があるか調べる。 10月／児童館公共施設やお店を訪問する。
		生きものとなかよし	チレンジスクール実行委員長	5月28日(土)／おたけやきの育て方を教えてもらう。
3	社会	学校のまわりのようす	地域在住の郷土史家	5月15日(火)／地域の様子を探る。自分たちの住む地域の良さを発見する。
		地域のたからをみつめよう	大東院住職 大久保領家お囃子連	地域にある貴重な文化財を探る。 学区内の大久保領家に伝わる伝統芸能(お囃子と舞(獅子舞など))
4	社会	地域の安全を守るおまわりさん	保清防署大久保出張所番員 大久保交番 警備官	4月18日(水)／消防見学。番員による施設、設備等の説明と消火のデモンストラーション 5月15日(火)／地域の様子を探る。自分たちの住む地域の良さを発見する。
		地域の安全を守るおまわりさん	大久保交番 警備官 大久保支所番員	消防見学。番員による施設、設備等の説明と消火のデモンストラーション 地域の特色ある地域の様子
5	社会	自然災害について	桜区社会福祉協議会	1月／防災の体験。認知症サポーター養成
		自然災害について	地域在住の郷土史家	地域在住の郷土史家
6	社会	パラリンピックについて	埼玉県パラリンピック協会 フランドルサッカー協会	1月／障がい者スポーツの体験
		年に変わる芸術文化	埼玉県在住の能楽師	7月11日(水)／能の鑑賞
けやき	生活	野菜名人になろう	地域在住の農業講師	通年／学校の農園で夏野菜、さつまいもづくり
全年生	読書タイム	読み聞かせ	図書館ボランティア「えがおの家」	1学期1回/読書タイムの読み聞かせ

□保護者・地域の意向を生かした活動

図書ボランティア、見守りボランティア、緑ボランティア、学習ボランティアなど、ファシリテーターが中心となり、継続の活動のほか、新規の取組も行われるようになった。

□PTAとの共催の研修会

教職員と保護者が共通のテーマで、講師を招いて話を聞く機会を設定している。内容は保護者への啓蒙を目的としたものだけでなく、教育にかかわる普遍的なテーマも取り上げる。

④ 評価と改善

学校にとっては地域の人々の理解と協力を得た学校運営が実現し、地域にとっては学校を中心とした地域ネットワークが形成されることが挙げられることがメリットとして挙げられる。また、保護者にとっては、学校や地域に対する理解が深まることが期待される。協働が無理なく、かつ停滞しないよう、改善策を学校だけでなく、保護者・地域も交えた場で協議していく。

4 おわりに

学校経営ビジョンの実現を図るためには、教職員の学校運営への参画意識をもたせる内からの刷新だけでなく、地域連携マネジメントの視点から、外からの刷新も図っていくことが重要と考える。校長として、プロデューサー的役割、コーディネーター的役割、スポークスマンの役割があることを自覚し、強いリーダーシップを発揮し、課題解決に向けた経営ビジョンの実現を力強く進めていきたい。

研究領域（Ⅰ）学校経営

第2分科会 組織・運営

研究課題 学校経営ビジョンの実現を図る活力ある組織づくりと運営

視点

② 誇り高き子どもを育むための活力ある運営

提案者 三郷市立前間小学校長 寺山友也

1 はじめに

視点「誇り高き子どもを育むための活力ある運営」を実現するためには、校長として、学校組織を意図的、効果的に機能させることが必須である。そのためには、組織の一員である教職員個々の役割を明確に示し、持てる職務能力の発揮（向上）に努めさせ、チームとして協働し取り組む意識（学校運営参画意識）を高めていくことが重要である。本校は、今年度「学力向上推進研究」「英語活動・英語教育推進研究」「算数課題解決研究」という3つの委嘱を頂いている。これらは、教職員にとって負担はかかるが、逆にこの委嘱を本校のステップアップの機会と捉え、校長として活力ある組織づくりと運営に向けての具体策を述べる。

2 本校の概要

本校は、三郷市の北東の端に位置し、学区の東側を江戸川が流れ、北側を吉川市に接している。学区は主に早稲田団地など住宅街からなり、



地域と共につくるゴーヤ緑のカーテン

かつては児童数1200名を超える大規模校であったが、地域社会の変化に伴い現在は小規模校となっている。今年度は、小規模校のよさを強みと捉え、一人一人の小さなきらりを大切に、小さいからこそきりとひかる学校づくり「小規模校の特性【強み】を生かした学校経営」を推進している。

3 研究概要

(1) 組織の見直し

① 校務分掌

本校は前述の通り小規模校であるがため、校務分掌も一人の教員が複数の主任を担当する上、人事異動も少ないため分掌が固定化していた。また、臨任者2名に高学年の担任を任せていた。そこで、これまで何年も受け入れの無かった初任者配当を要望し、長い期間を見通して力量有る人材育成を目指した。

② 人材育成

本校の職員は、全員が日々熱心に職を務める恵まれた構成である。しかし、それに甘んじているだけでなく、その中から管理職候補のミドルリーダー・主幹教諭・教頭とそれぞれの持つ個の力を、いかに同じベクトルに向けるかが校長の使命である。そこで、今年度の3つの委嘱は、学校活性化の良いきっかけと前向きに捉えている。それぞれのライフステージに合わせ、委嘱を通して、いかなる力をつけさせるかに傾注した。

③ 保護者対応

過度な要求・要望を繰り返す保護者に対して組織を生かした対応を心掛けた。校長が対応（火消し）に埋没せず、具体的方針を示すことが重要である。また、保護者の新たな要求への回答判断は校長が行い、決して窓口の教員に任せてはならない。

④ 安心・安全な学校づくり

定例の安全点検は、言うに及ばず、毎週の点検（危険箇所の早期発見）を複数で組織的に、その後の迅速な報告・連絡体制を円滑に進めている。せっかくの施設・教材に対して「故障中・使用不可」の表示は有り得ないとする。

(2) 小規模校ならではの組織を生かした対応

① 不登校児童0への取組

全校児童160名（全学年単学級）のため、教職員が一人一人の顔と名前が分かるという利点がある。そのため、児童の些細な様子の変化を見逃すことがない。また、その後の報告・連絡そして対応がスムーズに行えることこそが、本校の強みであり、チーム前間の組織力である。

登校を渋る児童の原因は、それぞれであるが、担任一人が抱え込むことの無いよう担任外・養護教諭を含めたプロジェクトチームで対応している。

(3) 学力を伸ばす【知育】

① 組織再編成

学力向上の委嘱は、今年度2年目に入り発表の年を迎えたが、敢えて組織の再編成に着手した。具体的には、校長を含めた推進委員メンバーを絞り、よ

り実効性のある提案を発信し、校内研修を推進していった。先を見通し、つきたい学力→到達点の姿を示し、着実に一步一步進めているところである。

② 授業改善

三郷市教育委員会ご指導の「三郷の授業づくり振り返りチェック10」という授業の自己評価シートを全職員で共通理解している。具体的には、今年度の重点として、ねらいや課題を明確にし、学習の見通しを持たせ、振り返りを大切に学習内容を定着させる授業を日頃から心掛けさせている。また、教職員評価システムにおいて、管理職と教員との授業における共通の尺度としても活用する。

③ 新イングリッシュルーム開設

委嘱を受けた後、近隣及び先進校のイングリッシュルームを視察し、開設の準備を整えた。そして、市の予算措置により、大型絵本・読み聞かせCD等教材が飛躍的に充実した。1年生にとっても「あの部屋（ゾーン）に行くと、英語で楽しい学習ができる」という空間作りが行えた。今後は外国語主任を中心に、段階的に文字を「読むこと」「書くこと」を加えて、総合的・系統的に扱う教科学習を進める。

④ 特別支援学級の新設

教室訪問の際、いくつかの学級で、特別な支援を必要とする児童が目にとまった。早速、校内教育相談部会にて実態把握を行い、適切な指導と支援について検討を始めた。特別支援教育コーディネーターを中心に、保護者との相談、市教委・三郷特別支援学校等外部機関との連絡調整等、段階を追って進め、今年度特別支援学級を新設することができた。特支担任の努力により、これまで多動であった児童に落ち着きが見られ、教育的ニーズに合った指導が進められている。また、他の教員も特別支援教育の視点に立った指導を学ぶよい機会となっている。

(4) 体を鍛える【体育】

① 体力向上

体育主任を中心とし、いかに情報を発信し校内の指導を同一方向に向けさせるかを心掛けている。具体的には、



さわやかタイムでの鉄棒運動

教科体育の充実のため、三郷体育学習会作成の授業マニュアルをもとに進めている。また、来年度「体

力向上研究」の委嘱も予定されているため、今年度から「さわやかタイム」（業前運動）の中身を精選した。運動の習慣化とともにラジオ体操の一層の定着と質の向上により体力向上を培う。

② 時を守る主体性を育てる

常に毎時間開始終了の度に鳴っていたチャイムを必要最低限に減らす試みを昨年度3学期に始めた。本校は、各廊下等の時計も正常に機能しており、児童が時計を確認する環境が整っていた。そこで、常に人の行動が音（チャイム）に反応するのではなく、自分で時計を見て、時を守る主体性を育みたいと考えた。今後、新学習指導要領において必ずしも45分間という時間枠にとられない教育課程（外国語等）も実施可能となる。

(5) 心を育てる【徳育】

① 三味線をとおした豊かな体験活動と交流

本校の伝統的な特色有る活動として、三味線・陣太鼓演奏がある。これは、地域の三味線の会（弘春会・鈴の会）の方々に、長年に渡りご指導頂いている活動である。



三郷市市制施行45周年記念式典での演奏

この活動により、豊かな体験が得られ、子ども一人一人に自信を根付かせることができた。

② 新たに保育所との交流

学区内に在りながら、これまで年度当初と年度末のご挨拶のみであった保育所との交流を、今年度開始する。園児を本校に迎え、ともに給食を食べた後、学校探検（案内）を計画している。今まで無かった取組を実施する難しさはあるが、調整を重ね、両校の合意が得られた。

4 まとめ

本校に着任して2年目の学校経営は、実質前年度3学期にスタートした。校長としての学校経営ビジョンを描き、修正すべき点を見つけ、より確固たるものにして、組織作りと運営に努めている。今後も、「前年度踏襲は後退、活力と気力を示す学校経営」を三郷市の校長として肝に銘じ邁進する。

研究領域（Ⅰ） 学校経営

第3分科会 評価・改善

研究課題 学校教育の充実を図る評価・改善の推進

視点

① 「新たな知を拓く」教育を実現するための学校経営の評価・改善

提案者 上尾市立東小学校長 浅沼正義

1 はじめに

学校評価とは、平成28年に改訂された文部科学省の「学校評価ガイドライン」によれば、学校の教育活動等の成果を検証し必要な支援・改善を行うことにより、児童生徒がより良い教育活動等を享受できるよう学校運営の改善と発展を目指し、教育の水準の向上と保証を図るために行うものがある。

その3つの目的からキーワードを拾うと次の8項目が挙げられる。

- 「目指すべき目標の設定」
- 「達成状況・達成への取組の評価」
- 「自己評価」
- 「学校関係者評価」
- 「結果の公表説明」
- 「組織的・継続的な改善」
- 「学校・家庭・地域の連携協力」
- 「設置者の支援・条件整備等改善措置」

2 地域と学校の概要



本校は上尾市の中央部やや東に位置し、開校50年目を迎える学校である。児童数823名、学級数27学級、教職員数57名の大規模校である。保護者は、授業参観・懇談会をはじめ学校行事の参加は積極的であり、特にPTAや学校応援団、「おやじの会」などが組織を挙げて学校に協力しようとする体制があり、学校・家庭・地域の三位一体化した教育活動が日々なされている。

3 実践の概要

今回の研究を機に、前述の8つのキーワードから自校の学校評価を再点検し改善に取り組むこととした。

(1) 目指すべき目標の設定

着任当時、本校には学校教育目標（考える子・心豊かな子・体を鍛える子）と目指す学校像のみが設定されていた。そこで、3つの柱を目指す児童像に位置づけ、その上にさらに広い視野の「元氣あふれる東っ子の育成」を立て、目指す学校像を新たなもの（「信頼あふれる学校」子供が伸びる学校、分かる・できる喜びを味わえる学校、安全・安心な学校）にするとともに目指す教師像（「誇りあふれる教師」プロフェSSIONナルとしての自覚を持つ教師、資質向上のために自己研鑽する教師、保護者・地域に信頼される教師）を設定した。



(2) 達成状況・達成への取組の評価

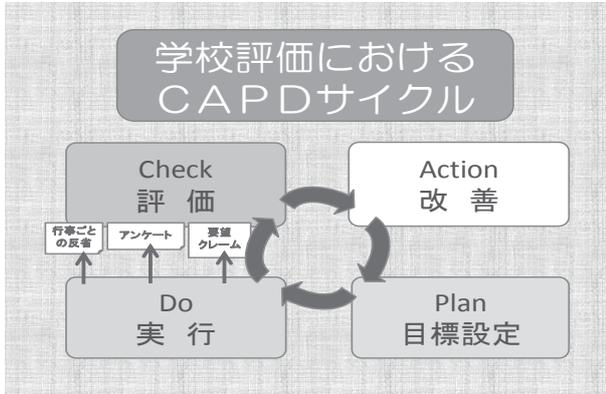
学校評価アンケートの質問項目を見直し、学校教育目標と関連づけたものに変更する。そのとき以下のことに留意する。

- 全てを網羅するものではない
- 具体的だが開かれた質問となるように

(3) 自己評価

いわゆる教職員の評価については、年1回1月頃に行うものと同じく、行事や活動ごとの自己評価（反省）を大切にしている。各行事を終

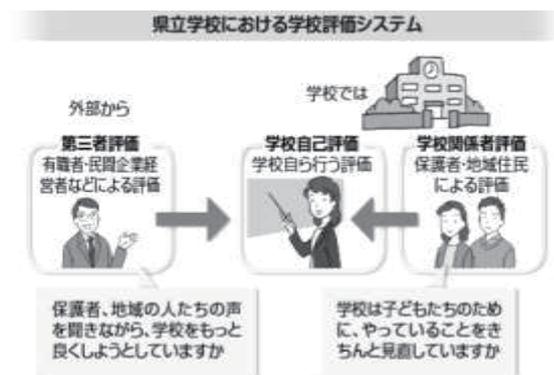
え問題意識の残っている時期に CAPD サイクルを意識して行うことでより有効な改善が行えている。



(4) 学校関係者評価

現在、本校の学校関係者評価委員会は、学校評議員、地域の事務区長、PTA会長・顧問（兼青少年健全育成団体役員）で構成され、「関係者による評価」や「改善に向けた検討」等を行っている。

また、上尾市では、平成31年度から全小・中学校においてコミュニティ・スクールを実施することとなっている。本年度は小学校2校・中学校1校（同一中学校区）で先行実施されているが、先行実施校のモデルを参考に、今後コミュニティ・スクールにおける学校関係者評価委員の構成及び人選を検討することとなる。



(5) 結果の公表説明

学校評価のまとめとして各学年の結果を印刷して家庭に配布し、それをホームページで公開する。

今年度は、学校だよりの増刊号として作成し、各事務区に協力いただき、地域へ回覧することを検討している。

(6) 組織的・継続的な改善

学校評価のまとめを各学年、各教科部会等で

検討し改善策を練っている。特に重要な案件については企画委員会等で検討し、翌年度の計画に反映している。

(7) 学校・家庭・地域の連携協力

本校は、PTA、学校応援団（緑のカーテン事業・防犯ボランティア・読み聞かせボランティア等）、「おやじの会」の各事業や学校行事への協力等が活発であるが、学校評価の公開や評価を生かした連携という点は、コミュニティ・スクールに向けての課題となる。



(8) 設置者の支援・条件整備等改善措置

学校評価のまとめ中、設置者の支援や条件整備等が必要な案件については、改善を市教育委員会等へ要望している。

4 おわりに

コミュニティ・スクールの実施に向けた準備を進めている本校にとって、今回の研究は、学校評価に関する整理・検討の上で非常に有益であった。その途上で学校公開日における「保護者意見」の回収を廃止するなどの改善を行った（「提出数が少ない」「記名がなく回答できない」「肯定的な内容が少なく教員の意欲を削ぐ」などの理由から）。

学校評価にとって重要なことは、学校の教育活動すべてが学校教育目標の具現化に向けた取組であることを常に意識するとともに、「実施が可能であるか否か」「教職員やPTAをはじめとする各協力団体に過剰な負荷をかけていないか」等の視点を持って、教育活動の活性化と精選を車の両輪として推進していくことであると考えている。

今後は、さらに検討を重ねるとともに、学校評価の根幹である学校教育目標や目指す児童像・学校像・教師像についても、見直していく必要があると考えている。

研究領域（Ⅰ） 学校経営

第3分科会 評価・改善

研究課題 学校教育の充実を図る評価・改善の推進

視点

② 学校づくり・人づくりを推進するための学校評価・教職員人事評価の工夫

提案者 春日部市立備後小学校長 越 晃 宏

1 はじめに

近年、情報化、グローバル化といった変化が予測を超えて起こり、先行き不透明な社会情勢が続いている。新学習指導要領においては、そのような社会に対応するために、新しい価値を生み出す源となる創造力を身につけるための「基礎学力」に加え、論理的思考力や自分で問題を解決していく能力が重視されている。

このような状況を踏まえ、県では、「学力・学習状況調査」を活用し、一人一人を伸ばす教育を推進しており、「主体的・対話的で深い学び」が学力向上につながることを示唆され、この視点で日々の授業改善を行うことが求められている。

こうした複雑化する学校課題に応えるため、学校においては、社会に開かれた教育課程を編成・実施・評価・改善し、学校を拠点とし、学校・保護者・地域が一体となって教育を推進しなければならない。したがって、児童生徒の教育を担う教職員の資質能力を向上させるとともに、学校の組織力を高め、教職員が一枚岩となって取り組むことがますます必要となる。

そこで、本研究では、教職員人事評価を活用し、優れた指導力と高い使命感を持った教職員の育成と教職員の絆を深めることを目指して取り組むこととした。

2 本校の概要

本校は、昭和47年に開校し、本年で47年目を迎える。校章のデザインになっている「やまぶきの花」は、昔、本校のある備後須賀地区にたくさん咲いており、地域の方に「やまぶきの里」として親しまれたことに由来している。

学校教育目標を「進んで学ぶ子・思いやりのある子・健康な子」とし、目指す学校像を、「夢と希望を育む活力ある学校」、合い言葉「人にやさしく みんなに愛される備後小学校」のもと、全職員が一丸となり、日々の教育活動に取り組んでいる。

3 本校の課題（学校づくり・人づくり）

- (1) 教職員人事評価の目標設定の工夫と人材育成
- (2) 校内研修を活用した学校の組織力の向上
- (3) 当初面談後の教職員への働きかけと見届け

4 実践の概要

- (1) 校長の経営方針を端的に、繰り返し発信
～「教育の成果は子供の姿で表す」をモットーに～
4月に本校に着任し、経営戦略上考えたことは、校長の

考えを児童、教職員、保護者、地域の方々に端的に、そして繰り返し様々な場面で発信し、浸透させることである。具体的には、合い言葉の設定とその基本方針を発信し、理解していただくことである。

《合い言葉》人にやさしく みんなに愛される備後小学校～基本方針～

- 1 子供も教師もよさを引き出し、活かす。
《「責める」より「攻める」》
- 2 子供の立場に立って、子供と向き合う。
《人に「優しく」そして「易しく」》
- 3 最後は授業で信頼を得る。《教師も常にレベルアップ》
- 4 子供、教師の取組を価値づけて広げる。
《教育の成果は子供の姿で示す》
- 5 地域へ出て行くことで支援もいただく。
《学校から地域へ、地域から学校へ》

(2) 教職員人事評価における目標設定の工夫と人材育成

上記の合い言葉、基本目標をもとに、目標と方策を設定している。また、表記は単純・明解にし、教職員が目標の連鎖をしやすくしている。以下に示す。

「評価領域Ⅰ」 児童も教職員もよさを生かした活力のある学校づくりの推進

- 子供も教職員もよさを引き出し、広げる。
→「やまぶき賞」「ひまわり賞」による「よいこと」賞賛運動
→「校長室通信」による戦略的な発信

- 人事評価制度を活用した、人材育成
→目標連鎖、面談による働きかけ

「評価領域Ⅱ」保護者や地域のつながり拠点としての学校づくりの推進

- 子供、教職員のよさを具体的に発信
→学校だより、ホームページによる「よいこと」紹介
- 保護者・地域の方にもやりがい
→学校だより「地域交流版」の新設（活動を毎月紹介）

「評価領域Ⅴ」教育課程の管理と適切な評価を活用し、児童のよさを引き出し、活かす教育活動の推進

- 週案と教室訪問により各学級の履修状況の常時見届け
- 校長室通信で、子供、教職員の活動を取り出し、教職員を基本方針に導く。（再掲）
- 国語の研究を通して、本校の特色づくりと人材育成

教職員が設定した方策の例

「評価領域Ⅰ 教科指導等」

- 児童の疑問や発言から学習課題を設定する。
- ペア学習やグループ学習でお互いのよさに気づかせたり、学び合うことのうれしさに気づかせたりする。
- 学級通信等で子供の頑張りを伝える。

「評価領域Ⅱ 学年・学級経営・生徒指導等」

- 一人一人が活躍する場を設け、学級への所属感を味わわせる。
- 地域の方を講師に招き、郷土について学ぶ。
- 一人一人の頑張りが見える学年経営

「評価領域Ⅲ その他の校務等」

- 校庭、体育館の体育倉庫の整理
(誰でもいつでも使いやすいように)
- 出張等で得た情報を全職員にフィードバック
(児童の健康管理の一助として)
- 学校徴収金システムを見直し、会計事故を未然に防ぐ。

当初面談において、教職員のキャリアステージと校務分掌に応じて主として次のような観点で指導・助言を行った。

- ① 学年主任等のベテラン・中堅教員に対して
 - ・並行を組む教員の育成を行い、学年経営につなげること。
 - ・新学習指導要領に沿った授業を実践し、信頼を得ること。
 - ・悩みや困り事は、みんなで共有し、管理職にも明日を待たず相談すること。
 - ・地域の行事に参加する機会は、積極的に生かすこと。
- ② 経験5年未満の若手教員・臨任教員に対して
 - ・並行を組む先輩教員から積極的に学ぶこと。
 - ・子供の立場に立って、授業を行い、信頼を得ること。
 - ・悩みや困り事は、一人で抱えないで相談すること。
- (3) 校内研修を活用した学校の組織力の向上

本校は、市教育委員会の国語教育の研究委嘱を受け、本年度が発表の年である。本校はこれまで、研究を進める上で一部の教員の力に頼り過ぎる傾向にあった。そこで、今年度は、「一人の百歩よりみんなの一步」を研究の合い言葉として、「日々の授業改善」に全員で取り組むこととした。

① 研修へのきっかけ作り「校長による模擬授業」

4月、まずは、校長が研修に対して本気で取り組む姿勢を見せた。そこで、「スイミー」(第2学年教材)を使って、「初発の感想を生かした授業の展開～発問・切り返しの工夫～」を課題に模擬授業を行った。

② 検証授業で課題の共有

6月、低・中・高それぞれの学年において、検証授業を行った。全職員が授業を参観し、授業後にワークショップを行い、課題を共有した。その後、全職員で共通の実践を授業内で行っている。

(4) 当初面談後の教職員への働きかけと見届け

① 教室訪問で教職員へ指導・助言

教室訪問を随時行い、訪問後は、具体的な指導場面を取り上げて、教職員を認め、励ます。特に、1時間の訪問を行った際は、コメントペーパーを作成してフィードバックする。

② 機会を捉えた声かけで教職員のやる気に火を灯す

「教育の成果は子供の姿で表す」を常に意識し、「子供の変容」の視点で、教職員には働きかける。

③ 校長室通信で、子供の変容した姿や教職員の活動を取り出し、教職員を基本方針に導く。



④ 負担軽減検討委員会で教職員の思いや考えをつかむ 月1回の運営委員会後に開催し、教育活動の成果や課題について意見を出し合う機会を作り、教職員の考えを学校経営に生かす。

5 まとめ

1学期末に行った学校評価では、「教材研究を熱心にやったり、生徒指導について真剣に話したりするなど、職員室の会話に変化が出てきた。」「本年度の研修は、日々の指導に生かせるものになっている。」「確実に子供たちに力がついていることが実感できる。」といった成果が教職員から挙げられた。一方で、「負担が一部の先生に偏っている」といった声も依然としてあり、組織力を高めるにはさらなる働きかけが必要である。

また、地区懇談会では、「子供たちの挨拶がよくなった」「学校の様子がよくわかるようになった」といった評価がある一方で、「もっと子供たちを地域の行事に参加させてほしい」という強い要望もあった。本校は、校区内の7つの自治会に見守られた、地域とのつながりの強さが特色の学校である。さらに地域の声に耳を傾ける必要があると実感した。

今後も、「教育の成果は子供の姿で表す」ことを大切にして、学校づくり、人づくりを推進していく。